

本論文の目的は、20世紀フランスの女性哲学者サラ・コフマン（Kofman, Sarah : 1934-1994）の自伝『オルドネル通り、ラバ通り』（*Rue Ordener, rue Labat*, Paris, Galillé, 1994）の読解を通じ、その幼年期の経験が、彼女の哲学的営為をいかに基礎づけていたのかを明らかにすることにある。このため、われわれは、フランス・カーンの「現代出版記憶研究所」（略称 IMEC : *Institute Mémoire de l'édition contemporaine*）において、当該書の草稿を調査し、公表されたヴァージョンとの比較・検証を行なった。

コフマンの哲学的営為の固有性は、彼女の幼年期に求められる。コフマンは、正統派ユダヤ教の一派ハシディズムを信奉するラビを父とし、厳格な戒律に則った幼児期を送った。しかし、彼女が8歳のとき、ナチスドイツ占領下のパリで起こったヴェルドローム・ディヴェール大量検挙事件の折、父親が「逮捕」され、アウシュヴィッツ強制収容所に送られた。コフマン自身も、母親とともに身を隠し、メメと呼び慕うことになるカトリックのフランス人女性に匿われた。こうして、父の不在、ユダヤ教文化とカトリック文化のそれぞれを担うかのような二人の《母》との間で葛藤が生じる。過酷な幼年期を過ごしたコフマンであったが、それでもなお「自分自身」として生き、生を肯定し、読み、書き続ける哲学者となる。しかし、彼女は、1994年に自らの命を絶った。かくして自伝『オルドネル通り、ラバ通り』は、コフマンが自らの意志で出版した事実上最後の書物となった。

当該書冒頭は、次のように始まる。「彼から私に残されたものは1本の万年筆だけだ。[...] 私がそれを捨てようとして決心する前に私のほうが早々と『見捨てられた』のだが、その後も私はずっと手放せないでいる。スコッチ・テープで応急処置されたままの姿で、それは今も私の目の前の仕事机の上であって、私に『書け、書け』と強いてくる。私がこれまでに書いてきた多くの本は、<それ> ça を物語るために、横断してこなければならなかった道だったのかもしれない」(KOFMAN,1994a,p.9)。

コフマンは、父、母、メメの3人の「死」について語ることに、すなわち「喪の作業」を行うことにより、「それ」としか呼び得ない何かを何らかの仕方で示そうとした。

われわれは、コフマンの幼年期の経験が、どのように彼女の哲学的営為を基礎づけていたのかを考察していく。本論は3部構成となっている。

第1部「父の喪」では、父ベレクが検挙された場面の草稿における描写と公表されたそれとを比較し、なぜ3つの修正が行われたのかを検討した。

第1に、父が検挙された場面の「絶対的に悲劇的な絶望の場面」という草稿における描写をコフマンは修正した。それは、「ユダヤ的な」形容である「絶対的なもの」と「ギリシ

ア的な」形容である「悲劇的なもの」が相入れないからであると解釈した。なぜなら、「悲劇的」という形容は、アウシュヴィッツでの父の「死」をアリストテレス的なカタルシスと化す恐れがあるからである。

第2に、草稿における「神々に見捨てられた」という描写が、「父に見捨てられた」という描写に修正された。これは、コフマンにとっての「絶対的なもの」が、ギリシア的多神教の「神々」ではなく、「不在の《父》」であったからと解釈した。父ベレクは、死の収容所において、「安息日中の安息日」といわれるヨム・キップール（大贖罪の日）に、ユダヤ教の戒律に従い、労働を拒否したために殺された。いかなる休息も許されない収容所では、「労働」は「死」を意味する。こうした中で、父ベレクは、「死」に抗した。コフマンは、父の不在によって露わとなった「無限の関係」を示唆するために、この修正をしたのだとわれわれは解釈した。

第3に、草稿に引用された聖書詩編 137 編が削除された。この詩編は、バビロン捕囚の悲しみと復讐を吟じている。この削除の理由を「赦し」は「不可能なものそのものとして自らを告げざるをえない」というデリダの言葉を手掛かりに考察し、この詩を削除することにより、コフマンが復讐の放棄と「赦しの不可能性」の両方を無言のうちに告白をしたのだとわれわれは解釈した。

第2部「母の喪」では、敵対関係にあるとみえた実母の死に対しても、コフマンは「喪の作業」を行ったのが問題となる。『オールドネル通り、ラバ通り』の中で、唯一、実母の死に触れている一文-「母が亡くなったとき、この葉書を探したが見つからなかった。何度も繰り返し読んだものであったし、今度は私が持っていたと思ったのだ。(KOFMAN, 1994a, p.16.)」-を分析した。この「葉書」とは、ドランシー一時収容所から父が送ったものである。母の死に際し、コフマンはこの「葉書」を「父の最後の生の証」として所持したいと思い、それを母のハンドバッグの中に探した。しかし、その紛失に気づく。そのため、彼女は、「あたかも、もう一度、あらためて父を失ったようだった」(ibid.)と感じる。

先行研究では、コフマンは、母に《父》の痕跡のみを探しているという解釈、また、それ以外の「父の遺品」である「万年筆」を忘却しているという解釈もある。しかし、われわれは、この「万年筆」と「葉書」は、「父の遺品」として同じ地位を持ちえないと解釈した。前者は、生前の母のハンドバッグから盗み出したものであり、他方、後者は、母の死後に、彼女のハンドバッグの中に探しているものである。その限りで、「葉書」は「母の遺

品」でもある。したがって、「もう一度、あらためて父を失ったようだった」のは、《父》の痕跡を探していたところの「母の身体」を失った喪失の悲しみであるといえる。したがって、父の不在の現前の表象である「万年筆」、あるいはその象徴である《父》からの「書け」との命令は、今や《母》からの命令でもありうる。《父》と《母》は融合し、「喪の作業」は二重化する。この考察から、コフマンは、《父》の「喪の作業」をしているつもりで、実は、母の「喪の作業」をしているのだとわれわれは解釈した。

第3部「メメの喪」では、メメの死について触れられた『オールドネル通り、ラバ通り』の最後の一節を検討した。「彼女は最近 récemment、サーブルの養護施設で亡くなった。[...] 私は彼女の葬儀には行けなかった。しかし、神父が彼女の墓に手向けた言葉は知っている。この人は戦争の続く間、ユダヤの小さな女の子を救った人であった、と」(KOFMAN, 1994a, p.99.)。

先行研究では、メメの死に対しても、コフマンが冷淡であると解釈されてきた。しかし、われわれは、コフマンが、ヤド・ヴァシエム「世界ホロコースト記憶センター」が顕彰する「諸国民の中の正義の人」に、1987年にメメをノミネートした際の「証言」と、自伝『オールドネル通り、ラバ通り』の内容との間にみられる矛盾を検討することを通じて、メメに対する「喪の作業」を探った。

第1に、コフマンが、メメを「諸国民の正義の人」にノミネートし、神秘化したのは、「女性性の拒否」とであると解釈した。「女性性の拒否」とは、コフマンの定義によると、男性の願望に帰属する欲望であり、息子が母の欠如を隠すための「ペニス」、すなわちヴェールを贈りたいという願望である。コフマンは、あたかも男の子が「ペニス」や「大便」を愛する母に贈るかのように、「諸国民の正義の人」の栄誉をメメに贈り、彼女を神秘化したのである。

第2に、コフマンは、『オールドネル通り、ラバ通り』において、メメが「完璧で良い母」ではないことを彼女の反ユダヤ主義的偏見から暴いている。それは、哲学者としての脱神秘化の作業である。コフマンは「アナンケー」(必然性)あるいは「良くも悪くもある自然 = 《母》」としての「女性性」を受け入れる必要があった。そのせいで、メメを「捨てた」ようにみえるのである。

最後に、われわれは、コフマンが、『オールドネル通り、ラバ通り』を、日付の変更をして締めくくったことを問題にした。1993年～1994年に執筆した当該書の末尾で、1987年の

メメの死を「最近」と書き換えているのである。1987年は、父の死について語ったもうひとつの自伝的著作『窒息した言葉』の出版年である。この日付変更により、メメの死は、コフマンの父および実母の「死」へと融合する。そこから、新たな「喪の作業」の開始が予感される。また、この日付変更は、『オールドネル通り、ラバ通り』に秘められた「笑い」でもある。この「笑い」は、読者を『窒息する言葉』へと導く。この書物の冒頭は、さらに、その前年に書かれた著作『人はなぜ笑うのか』へと誘う。後者の書物は、ヨム・キップールにシナゴグで出会う敵対する二人のユダヤ人の間で交わされる「機知」によって終わる。この「機知」は、互いに赦し合うことの不可能性を露わにするが、まさにそのことによって、「笑い」を引き起こす。この「笑い」は、いかなる抑圧もない「赦し」の物語の新たな開始を示唆している。

以上の考察を経て、われわれは、『オールドネル通り、ラバ通り』冒頭で述べた「それ」が、「書くこと」への衝迫を引き起こす幼年期の欲動の蠢きであると解釈した。ファシズムの時代に、自らの命の危険を顧みず、それぞれの仕方で、子どもの命を救った3人の大人たち-父・母・メメ-への「喪の作業」をコフマンは生涯を通じた哲学的営為において遂行した。『オールドネル通り、ラバ通り』に秘められた「笑い」は、もはやコフマン自身によっては、語られることはなかった、ある「赦し」の物語に開かれている。

補論「不安と《笑い》によるカタルシス-クラインとヒッチコック」では、『オールドネル通り、ラバ通り』19章で言及されたヒッチコックの映画『女が消える』について、コフマンの没後に発表された当該映画の批評を参照し論じた。この映画がコフマンに喚起する二人の《母》をめぐる幼年期の不安をメラニー・クラインによる対象関係論を手掛かりに分析した。さらに、この作品が、弱い《父》の介入によりもたらされる、アリストテレス的ではない、「笑い」によるカタルシス効果を含意することを示した。